



武石氏の館跡と伝わる寺院

千葉常胤には「千葉六党」と呼ばれる6人の息子がいました。三男の胤盛は武石(現在の花見川区武石町)を与えられ、地名から「武石氏」を名乗りました。長胤寺の歴史は、胤盛の子孫の武石長胤が弘長年間(1261～1264)に館を寺にしたことに始まると伝えられ、寺名も長胤の名に由来しているとされます。境内には土塁(土で築かれた城壁)状の地形がみられますが、これは長胤寺が寺院としてだけでなく、後の時代になって防御拠点として整備された痕跡と考えられます。

戦国時代、小田原北条氏の勢力が当地に及んでいく中で、武石氏は次第に時代の波に飲み込まれていったものと考えられます。



『吾妻鏡』文応元年(1260)十一月二十七日の条
長胤が将軍宗尊親王の鶴岡八幡宮参拝に
供奉(ぐぶ)したことが記されています。

一方、長胤の従弟である武石宗胤は、本拠を陸奥国亘理郡(現在の宮城県亘理郡亘理町)へ移し、亘理を名字とします。その子孫は、江戸時代には涌谷(現在の同県遠田郡涌谷町)で仙台藩主伊達家一門に列し「涌谷伊達氏」となり明治時代を迎えます。

武石氏は一族全てが東北に移ったのではなく、長胤とその子孫のように房総の地にとどまって活動した者たちも多くいたのです。

長胤寺は下総の地における武石氏の活躍を今に伝える証と言えます。

